

道路の景観の定量的評価に関する研究 (第3報)

宮崎大学工学部 正員・藤本 廣

津山市役所

光石 良隆

1. まえがき

景観工学の領域で、いわゆる“景観”の評価に関する研究に数量化理論による分析手法が適用されるようになってから既に10年余に及ぶ。著者(藤本)も数年前に工学的景観としての道路景観の要因分析に数量化理論Ⅱ類を導入し、その適用性を検討したことがあるが、当時、最大の欠陥はサンプル数の不足という点にあった。今回、評価実験の被験者数(サンプル数)を100名に拡大し、改めてその適用の妥当性を再検討してみた。なお、この再検討に当っては、①過去の分析過程で明確ではなかった道路景観の概念、つまり外的基準を明確にし、②冗長情報の処理を考慮に入れ、さらに③判別のための合成変数の再現値を求めたうえで判別の精度を検討してみた。

2. 道路景観の評価項目と要因との相関関係

図1に著者が考案して採用してきた道路景観の評価項目と評価要因との相関系統を示す。過去の研究では、この系統図に見られるように、最終的に総合評価として、「道路景観の良さ」として表現し、道路景観そのものの概念に明確な外的基準を与えたいと分析したという欠陥があった。今回はその点を改めて、道路景観の概念と、(Ⅰ)背景を視野に入れた「道路も含めた景観の良さ」(総合的道路景観、あるいは外的道路景観)と、(Ⅱ)背景を視野に入れない「道路自体の景観の良さ」(独自の道路景観、あるいは内的道路景観)とに明確に区分した。すなわち、図1で⑨の「道路自体の良さ」が上記の「内的道路景観」の最終的な評価項目となり、図1で最後の「道路景観の良さ」と「外的道路景観の良さ」と最終的に総合的な評価項目として位置づけることにした。

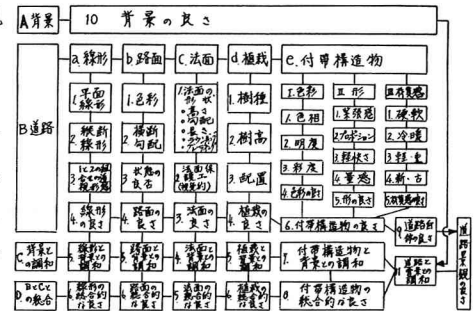


図1. 道路景観の評価項目と評価要因間の関係

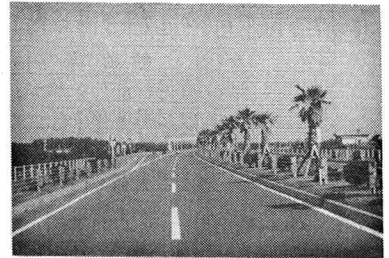


写真1. 評価対象の道路景観

3. 評価実験

評価主体としての被験者(本学学生)に、著者が撮影した20種の評価対象としての道路のカラー・スライドを見せ、スライド1枚毎に、図1に基づいて作られた37項目からなる評価項目について3段階のカテゴリ(①悪い、②普通、③良い)に対して個人の主観による判断をアンケート方式で記入してもらった。この実験方法は過去の方法と同様である。

4. 分析結果と考察

分析に当っては、前記2の道路景観概念の区分に沿って、(Ⅰ)背景と入れた道路の総合的な評価と(Ⅱ)背景と入れない道路自体の評価とに判別基準を明確にした。本文では、主として(Ⅱ)の分析結果について説明する。(Ⅱ)の評価分析では、判別基準として①道路自体の景観とし、その構成要因として②植栽と③付帯構造物を、植栽の要因として④樹種・⑤樹高・⑥配置と、付帯構造物の要因として⑦色彩・⑧形状

表1. 評価結果の一例

category	reaction	category value	weighted mean	normalized value	range
植栽	1	15	0.0	-1.08720	1.66156
	2	55	1.09132	0.00411	
	3	20	1.66156	0.57435	
付帯構造物	1	18	0.0	-0.28781	0.36952
	2	63	0.34800	0.06019	
	3	17	0.36152	0.08170	
樹	1	12	0.0	-0.65123	0.90060
	2	43	0.70060	0.24938	
	3	43	0.58359	-0.06764	
樹高	1	23	0.0	-0.09916	0.20772
	2	39	0.05745	-0.06172	
	3	36	0.20772	0.10855	
配置	1	15	0.0	-0.99003	1.27424
	2	46	1.27424	0.20421	
	3	37	1.03805	0.04802	
色	1	18	0.0	0.29681	0.50287
	2	57	-0.50287	-0.20606	
	3	23	-0.01842	0.27839	
形	1	9	0.0	0.76763	0.86015
	2	67	-0.86015	-0.07252	
	3	20	-0.77387	-0.02624	
植栽	1	14	0.0	-0.41869	0.95449
	2	45	0.35225	-0.06644	
	3	19	0.95449	0.53580	

